

標式土器を語る「天神山式土器」

とっておき埋文講座②

富山考古学会 副会長 久々 忠義



天神山式土器

時期と地域差の目印

パソコンで「ひょうしき」という文字を入力すると、標識という漢字が出来ます。標式という語は一般的な辞書にはなく、考古学の世界の用語です。交通標識は速度制限や進入禁止などの目印ですが、標式土器は時期と分布地域の違いを示す目印です。標はしるしのこと、式は一定のきまりを意味するので、標式土器は、形や文様（しるし）が一定のきまりに基づいて作られている土器ということになります。

縄文時代は、約1万3千年間の長期にわたりますが、その間は、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の六期に大別され、各期は、いくつかの土器型式によって細別され、それが地域ごとに並べられた全国縄文土器編年表ができています。天神山式土器は、富山県の縄文時代中期中葉の目印となるものです。図1は、北陸の縄文時代研究に取り組んだ小島俊彰先生が作成したもの（氷見市史資料編5）。小島先生は、昨年10月に亡くなられました。多くの論文を残されました。今日はその研究の一端を紹介することになります。この編年表には、上山田・天神山と記載されています。上山田は、石川県かほく市にある上山田貝塚のことと、石川県では上山田式と呼ばれています。その下に、朝日A上層とあります。大正7年に朝日貝塚A地点で発掘されたバケット型土器と呼ばれる土器があります。これが当時の標式土器でした。昭和30年代までは、天神山式ではなく朝日A上層式あるいは北代式と呼ばれていました。

大別	細別	富山・石川	(東北)関東
中期	前葉	新保 新崎 上山田・天神山 (朝日A上層)	五領ヶ台
	中葉	古府 串田新I 串田新II	勝坂 加曾利E I 加曾利E II 加曾利E III 加曾利E IV
	後葉		

図1 縄文中期の土器型式

天神山遺跡—最初の遺跡—

天神山式土器は、魚津市天神山遺跡から出土した縄文土器をもとに名付けられたものです。

天神山遺跡は、魚津市小川寺字天神山に所在します。標高95mの舌状台上に立地し、東は布施川の支流小川寺川に面し、西に標高163mの天神山があります。その山上は戦国時代の山城で、弥生時代の高地性集落としても注目されています。縄文集落がこの山の麓に立地することは、山が縄文人の交通の目印となっていたためかもしれません（図2）。

この遺跡は、明治20年（1887）頃、魚津の人阿波加修造と吉澤庄作が、石器時代の遺跡であることを唱え世に知られるようになりました。明治41年、吉澤は早川莊作を連れて坪井正五郎（日本初の人類学者）を遺跡へ案内しました。早川はこののち「富山考古学の草分け」と呼ばれるようになります。ですから、天神山遺跡は、富山県最初の遺跡であり、富山考古学研究の始まりの遺跡といえます。

縄文土器は、明治12年（1879）に大森貝塚の報告書に記されたコードマークドポタリーの訳語ですが、縄文時代の語が使われるようになったのは、昭和34年頃からのようです。

天神山遺跡は、昭和30年（1955）と33年（1958）に発掘調査が行われました。その結果、縄文土器の特徴が明らかになり、それから天神山式土器の呼称が使われるようになります。



図2 天神山遺跡 東から 奥が天神山

天神山式土器の諸段階

昭和49年（1974）、小島先生は、天神山式土器を2段階に分ける説を発表しました。昭和59年に朝日町境A遺跡の発掘調査が行われ、天神山式土器が数多く出土しました。それらは、平成10年に重要文化財に指定されています。私は、境A遺跡の天神山式土器を3期に区分しています。

天神山式土器の文様は、斜行した渦巻基隆帯を配し、その周囲を半截竹管文による半隆起線文で埋めるもので、基隆帯上には爪形文や刻目文が刻まれています。小島先生は、基隆帯上が爪形文で、半隆起線文間に三叉文を刻むものを第1段階、基隆帯上が刻目文になり、半隆起線文間に三叉文が少ないものを第2段階としました。

筆者は、口縁部断面と胴部下半の文様帯に注目して、以下のように3期に区分しています。（図3）

第1期（小島第1段階）

口縁部断面の形状が、口唇部が内面に傾くもの。この前の段階にあたる新崎式では口唇部が水平です。また、胴部は、基隆帯が胴部下半部に伸び、下半部の文様帯が分離していません。

第2期（小島第2段階）

口縁部断面の形状は、口唇部の幅が広くなり傾きが強くなります。胴部は、半隆起線文が垂下する下半部文様帯が生まれます。

第3期

口縁部断面の形状は、口唇部の幅がさらに広く、傾きも強くなります。胴部上半部の基隆帯は、S字状に短小化します。下半部の半隆起線文は、第2期では、区画を作っていますが、ただ垂下するだけの条線となります。次の段階の古府式では、口縁部内面の稜線が失われます。基隆帯が隆帯ではなく、半隆起線文となるものもあります。

天神山式は、吉府式（牛滑式）と合わせて天神山様式と呼んで一括される

ことがあります。形や文様の基本的要素は同じですが、少しづつ崩れていいくように変化します。その変化は、手抜きの方向性と呼ばれていたと記憶しています。土器の製作を親が子へ伝える際、形や文様のきまりが十分に子に伝わらず、細部が省略されていくということなのかもしれません。

国立歴史民俗博物館の研究チームによる年代測定結果を参考にすると、天神山式土器が使われた年代は、今から5,000～4,810年前の約190年間ということになります。そのような長い期間であったとすれば、その変化は、親も子も気づかないうちのできごとであったかもしれません。

特色ある土器の把手（突起）

天神山式土器は、石川県東部から新潟県西部に分布しています。新潟県の信濃川流域には火炎土器と呼ばれる土器が分布し、長野県・関東には、勝坂式、曾利式、加曾利E式、東北には大木式と呼ばれる土器が分布しています。

火炎土器には、鶏頭冠突起と呼ばれる鶏のトサカのような突起（把手）がつくものがあります。小島先生は、それを地域の紋章のような意味があるのではと考えました。そして、天神山式



図4 三ツ山装飾環状把手（上：朝日町教育委員会提供）と動物形把手（下）

土器の三ツ山装飾環状把手がそれではないかと思いつきました（図4上）。紋章には、その集団のなりたちに関わる物語が込められているともいわれます。突起（把手）は、そのような地域集団の自己主張なのでしょうか。

三ツ山装飾環状把手は、円環上にW状の小さな突起が付くものです。円環やW突起は何を意味しているのでしょうか。黒部市愛本新遺跡では、天神山式に先立つ新崎式土器に、動物を思わせる突起が付いています（図4下）。目や鼻を刺突で、手足は三本紐、長いシッポがあり、私はクマネズミではないかと思っています。三ツ山装飾環状把手は、動物が変化して抽象化したものかもしれません。

天神山式土器の時代

天神山遺跡から出土する石器には、石鎌、石錐、凹石があり、穏やかな自然環境の中で狩り、川漁、木の実の採集などをしていた縄文人の暮らしが想像されてきました。ところが、近年、朝日町不動堂遺跡から出土した縄文土器にダイズの圧痕があることがわかりました。ダイズの栽培も行われていたようです。

天神山式土器の中心的な分布地域は、富山県と新潟県の県境付近です。この地域は、縄文人が宝石としたヒスイの産地です。ヒスイは、糸魚川市の姫川上流から流れ出し、境A遺跡が面する宮崎海岸にたくさん漂着したようです。当時は、川の水量も多く、海流も渦巻くような状況だったのかもしれません。

天神山式土器の渦巻文様については、長野県の土器に蛇や蛙などを思わせる文様があるので、蛇が想起されます。しかし、その分布地域がヒスイの産地と重なることを考えると、川や海の水の流れを表しているように思えてきます。（令和2年1月19日 第5回 県民考古学講座）

※タイトル写真と図2の写真は魚津市教育委員会提供

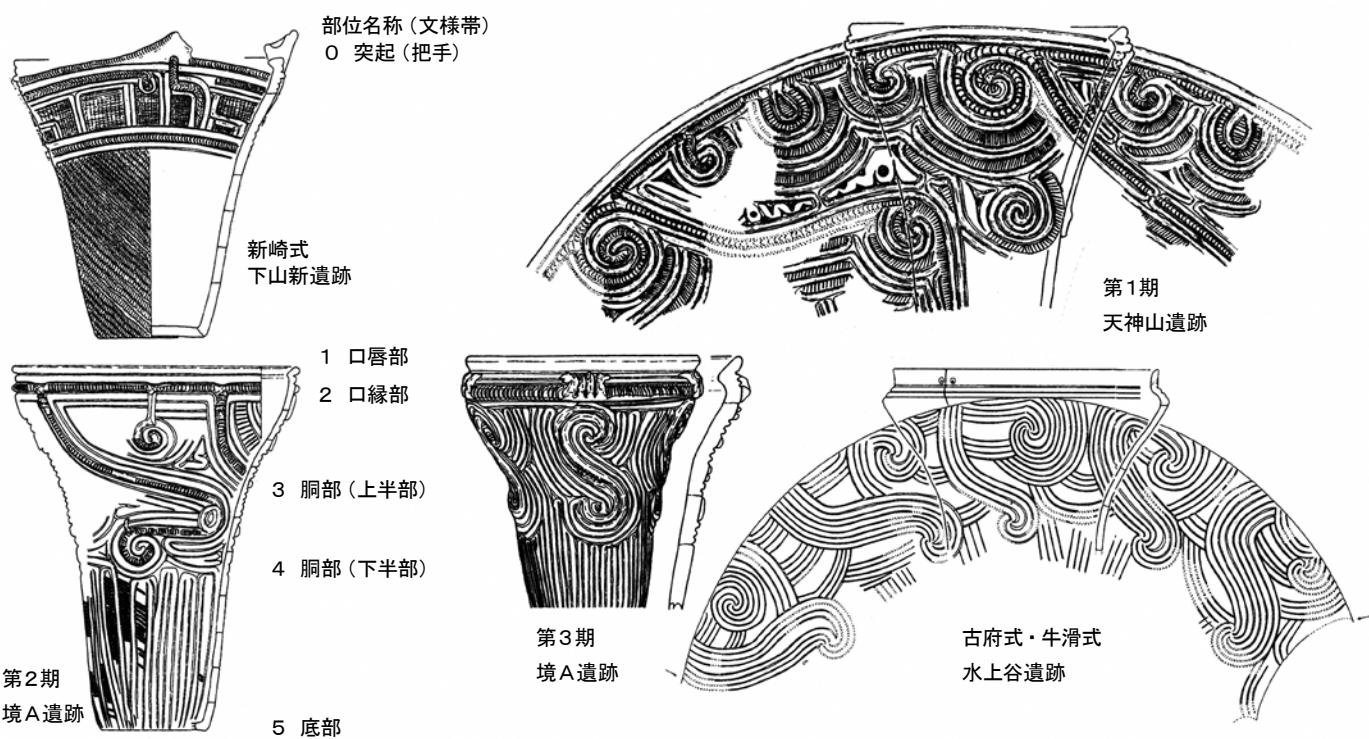


図3 天神山式土器の諸段階